

『暗夜行路』とその英訳に於ける「気持ち」について

森 豪

A Remark on “Kimochi” in *Anyakouro* and *A Dark Night’s Passing*

Tsuyoshi MORI

A Translation can give a new look to its original piece. It can express the meaning of the original more clearly. But there is a case in which the translator cannot find any word suitable for translation of the original in his own language. We can think it a negative element in translation, but we can think it an affirmative element because it can show the language’s distinctiveness which cannot be translated.

When we compare Naoya Shiga’s *Anyakouro* with its translation, we can find a Japanese word, “Kimochi” which can not be translated easily. The aim of this essay is to think of the characteristics of “Kimochi” or “Ki” which has Japaneseness, and show why it is difficult to translate the word “Kimochi” into English.

I

翻訳によって原典は、新しい様相を呈する。翻訳によって原典は、新しい言語表現を得る。その新しさには、プラスとマイナスの両面がある。プラスの面の一例が、原典の不明瞭な表現が翻訳によって明確な輪郭を与えられ、理解し易くなる場合であり、マイナスの面の一例が、言語や文化の異質性によって翻訳が不可能で、本来の意味が伝えられない場合である。

マイナスの場合でも、それは見方を変えれば、プラスになる。翻訳の不可能性を知ることは、その言語表現の独自性を知ることには他ならないからである。

原典とその翻訳を比較対照して読むことは、各々の言語の特色を知るのに有効であり、内容理解の上でも得ることは多い。

本稿では、志賀直哉の『暗夜行路』¹⁾とその英訳である Edwin McClellan 訳 *A Dark Night’s Passing*²⁾を比較対照して読みたい。

翻訳の光を原典にあてることによって、今迄当然のこととして見過していたものに気づくことがある。日本人にとって当然であることの第一は、日本人であることである。翻訳という光の中では、そのことを意識せざるを得ない。そしてそのことを意識的に考えることができる。

英訳の光の中で本稿に於て見たいのは、志賀直哉と彼の反映である『暗夜行路』の主人公、時任謙作の日本人的性格であり、志賀直哉自身が『暗夜行路』は外的な事件の発展よりも、事件によって主人公の気持ちが動く、

その気持ちの中の発展を書いた³⁾と述べている言葉の中にあつて、作品や主人公に於て中心的な言葉であると思われる「気持ち」という言葉であり、「気」という言葉の特質である。

II

『暗夜行路』の「大山体験」の描写は、作品の中心とも言うべきもので、作品の主人公、時任謙作が到達した思想の表現であり、作者の志賀直哉が老年に至るまで自身のものの考え方の基調とした思想の表現である。その体験は、次のように描写されている。

(A)疲れ切つてはいるが、それが不思議な陶醉感となって彼に感ぜられた。彼は自分の精神も肉体も、今、この大きな自然の中に溶け込んで行くのを感じた。その自然というのは芥子粒程に小さい彼を無限の大きさで包んでいる気体のような眼に感ぜられないものであるが、その中に溶けて行く、——それに還元される感じが言葉に表現できないほどの快さであった。なんの不安もなく、眠い時、眠りに落ちて行く感じにも多少似ていた。一方、彼は実際半分眠ったような状態でもあった。大きな自然に溶け込むこの感じは彼にとって必ずしも初めての経験ではないが、この陶醉感は初めての経験であった。これまでの場合では溶け込むというよりも、それに吸い込まれる感じで、ある快感はあつても、同時にそれに抵抗しようとする意志も自然に起こるやうな性質も

あるものだった。しかも抵抗し難い感じから不安をも感ずるのであったが、今のは全くそれとは別だった。彼にはそれに抵抗しようとする気持ちは全くなかった、そしてなるがままに溶け込んで行く快感だけが、なんの不安もなく感ぜられるのであった⁴⁾。

須藤松雄氏は、ここに主人公が苦しみの果てに到達した「調和的自然関連」思想が表現されており、この思想を土台にしているということで、志賀直哉は我々日本人の代表であると述べている⁵⁾。この日本人らしい思想に対立するものが、西欧の「人間中心の対立的自然関連」思想である。

須藤氏は更に、志賀直哉の中に「対立的自然関連」思想が生動した時期があったけれども、それは「調和的自然関連」思想と入れ代わるものではなく、志賀直哉の「対立的自然関連」思想に基づく「自我貫徹の生」も「調和的自然関連」思想に源をもっていたと言っている⁶⁾。その言からすれば、志賀直哉は根本的に日本人らしい思想を土台にしていると言えるが、そのような志賀直哉に於ける「対立的自然関連」と「調和的自然関連」、言い換えれば西欧人的性格と日本人的性格の関係は『暗夜行路』の主人公の思想の変化として表現されている。それは次のような表現である。

(B)かつてそういう人間の無制限な欲望を賛美した彼の気持ちはいつかは滅亡すべき運命を持ったこの地球から殉死させずに人類を救い出そうという無意識的な意志であると考えていた。当時の彼の眼には見るもの聞くものすべてがそういう無意識的な人間の意志の現われとしか感ぜられなかった。男という男、すべてそのため、あせているとしか思えなかった。そして第一に彼自身、その仕事に対する執着からいら立ちあせる自分の気持ちをそう解するよりほかはなかったのである。

しかるに今、彼はそれが全く変わっていた。仕事に対する執着も、そのためいら立つ気持ちもありながら、一方ついに人類が地球とともに滅びてしまうものならば、喜んでそれも甘受できる気持ちになっていた。彼は仏教の事は何も知らなかったが、涅槃ねはんとか寂滅じやくめつ為楽ゐらくとかいふ境地には不思議な魅力が感ぜられた⁷⁾。

引用文(B)中の「そういう人間の無制限な欲望」とは、引用する前の段で述べられている「海上を、海中を、空中を征服して行く人間の意志」⁸⁾である。人間による海上、海中、空中の征服は、キリスト教的西欧思想の然らしめ

るところである。神によって作られた自然の中には神の言葉があるはずで、その言葉である自然の法則を探求し続ける。また人間は神によって万物の頂点に置かれ、万物を支配するように決定づけられている。自然を探求し、支配するという考え方は、「対立的自然関連」思想の立場にある考え方である。そこには、自然と対立する自我がある。

かつて主人公は、「対立的自然関連」の中で、強く自我を意識した。西欧の精神的立場に立っていた。それは『暗夜行路』前編第一章第九節に於て、日記という形で詳しく書かれており、重立った部分を次に引用する。

——人類の運命が地球の運命にきつと殉死するものとはかぎらない。ほかの動物は知らない。しかし人類だけはその与えられた運命に反抗しようとしている。男の仕事に対する、あく事なき本能的な欲望の奥には必ずこの盲目的な意志がある。人間の意識は人類の滅亡を認めている。しかしこの盲目的な意志は実際少しもそれを認めようとしていない⁹⁾。

たとえば、誰かが科学上の偉い新発見をしたというような新聞記事を読む。その時にも自分は泣きたい程、感動する事がある。これは何から来るか。意識しない人類の意志が奥底でそれに応ずるからではないか¹⁰⁾。

これらの言葉が、主人公が「対立的自然関連」の中にいた時の思想内容を示すものと考えられるものである。「対立的自然関連」思想は西欧的なものであるが、ここにある思想は、西欧的とは言いがたい、日本人らしいものを含んだものである。

主人公の思考の前提となり、主人公の思考の全域を覆っているのが、「地球の滅亡」である。その滅亡から逃れるために、人類は自然を征服すると主人公は考えている。しかし、飛行機を飛ばすことや「科学上の偉い新発見」が、西欧人の「地球の滅亡」に対する恐怖より生じてきたとは、常識的に考えられない。自然の征服の結果として、「地球の滅亡」が考えられても、自然征服の出発点としては考えられないのである。これは、主人公独特の受けとめ方であり、考え方である。主人公は、地球上の過去の生物の盛衰を考えて「地球の滅亡」を考へ出したのであるが、ここには仏教の「生者必滅」思想の影響があるように思われる。確かに、主人公はこのような思想を抱いた頃、仏教について何も知らなかったのであるが、仏教的なものが日本人の体質として備わっていて、それがここで出たのではないかと思われる。

また別の角度から、主人公の発想に仏教的な「生者必滅」思想があるにしても、主人公の意図は、その否定にあり、その否定によって西欧的立場に立とうとすることにあると言われるかもしれない。しかしその「必滅」思想を否定する、自然と対立する強固な自我の底に、「無意識的な意志」を設定したことは、主人公の日本人的性格をより明確に示している。それは、一見、自我を強固にしたように見えるけれども、逆に自己滅却とも言えるものなのである。

荒木博之氏は、『日本人の心情論理』に於て、日本人の「受け身文化と自己滅却」という特性について指摘している¹¹⁾。その言を借りれば、『暗夜行路』の主人公は、「地球の滅亡」を前提とすることによって、出発点からすでに「受け身」であり、自然を征服する自我の底に「無意識的な意志」を設定し、そこに主体を置くことによって「自己滅却」の状態であると言える。

このように主人公の「対立的自然関連」は、きわめて日本人の性格をもったものなのである。主人公の到達点である、「調和的自然関連にある状態」、「ついに人類が地球と共に滅びてしまうものならば、喜んでそれも甘受出来る気持ちになっていた」という状態を考え合わせると、主人公の中には最初から一貫して日本人の気質が流れていたと考えられる。

III

「無意識的な意志」についての引用文(B)の英訳は、次のようになっている。

(C) He had praised man's limitless ambition in the belief that it was an expression of his unconscious desire to save his own species somehow from the certain destruction that awaited his planet. And in those days, he had no alternative but to interpret all that he saw and heard around him—all the struggling and the scrambling—as manifestations of this unconscious will. After all, that was the only way he could understand his own dissatisfied, desperate attitude toward his work.

He felt very differently now. True, he was still tied to his work; it still was capable of upsetting him. But his present state of mind was such that if he were told that man would be destroyed together with his planet, he would gladly have accepted that fate. Though he knew nothing about Buddhism, such realms believed in

by Buddhists as “nirvana” and “the real of bliss” seemed irresistibly attractive to him.¹²⁾

日本文を英訳する場合、日本語を一つ一つ英語に置き換えていけばいいというものではない。日英語は、語順からして正反対なのである。日本語に忠実であろうとする程に、日本語らしい英語になって、英語らしい表現になることはない。そこで、日本文の内容を理解し、理解したものを英語らしく表現することが大切になる。そのことに関して、安西徹雄氏の言う次のような翻訳の原則をあげておきたい。

……英訳作業の前提となる手順として、日本文をいきなり英語に訳そうとするのではなく、その前に、まず日本文の言わんとしている内容をよく吟味し、言葉の背後にある状況をいわば論理的に解析して、その中から、英語の表現に必要な要素(例えば主語、代名詞、テンスなど)を明確に取り出し、英文法の枠組に従って配列する、という原則……¹³⁾。

英訳する場合、英訳者は、原文の日本文の内容をまず厳密に理解し、理解した内容を次に英語表現で再構築する。そこには理解と表現の二段階がある。日英語の相違は大きく、この二段階を経る間に、原文と隔たる可能性も大きい。逆に英語表現を得ることによって、その内容が明確になる場合がある。その好例が引用文(B)とその英訳である引用文(C)の冒頭に見られる。

引用文(B)と(C)の冒頭をもう一度記す。

(D)かつてそういう人間の無制限な欲望を賛美した彼の気持ちはいつかは滅亡すべき運命を持ったこの地球から殉死させずに人類を救い出そうという無意識的な意志であると考えていた。

(E) He had praised man's limitless ambition in the belief that it was an expression of his unconscious desire to save his own species somehow from the certain destruction that awaited his planet.

英文は明快である。原文の日本文よりも明快である。原文は、非常に不明瞭な文である。特に主語に関して不明瞭で、その意味で典型的な日本人の文である。

英語表現では、主語を明確にすることが第一に求められる。英訳者は“He”を主語にしたが、原文には“He”に相当する言葉、「彼」とか「時任謙作」とかの言葉はない。この英訳文は、安西氏の言う「日本文をいきなり英

語に訳そうとする」訳者による原文の文字通りの訳ではない。それによって、明快になっているのである。

原文の主語はどれであろうか。一見して主語らしきものは、「彼の気持ち」である。その述部として二つ考えられる。一つは、「無意識的な意志である」であり、もう一つは「……と考えていた」である。明らかに後者の主語ではない。「彼の気持ちは……と考えていた」とはならない。気持が行為者として考えることはない。行為者は、主人公の時任謙作であり、「彼」である。

ならば、「無意識的な意志である」の主語であろうか。「彼の気持ちは……無意識的な意志である」となるのであろうか。「気持ちは……意志である」という文は、奇異に感じられる。

原文に主語は表現されていない。「気持ちは」の「気持ちは」は主題であって、主語ではない。「……と考えていた」の主語は、謙作であり、「彼」である。「無意識的な意志である」の主語は、「無制限な欲望」である。これは、英訳者の解釈と一致する。

英訳文を和訳すると次のようになる。

人類の野望が、地球に付随する確実な滅亡からどうにかして人類を救いたいという無意識の願いの現われであると思って、彼はその野望をかつて賛美していた。

原文を読む日本人の読者は、主語を明らかに文法的に意識せずとも、『無制限な欲望』が『無意識的な意志である』と前後の文脈から解釈し、「考えていた」のは「彼」であると解釈していくものと思われる。その解釈が、英訳では、明確な英語表現となって具体化しているのである。

英訳によって、原文に新しい光が投げかけられ、内容がより明快に表現されることになった。その光は、また原文の言葉に新たな興味を起させる働きもする。

引用(D)を含む引用(B)には、「気持ち」という言葉が四度現われるが、(B)の英訳である引用(C)に於てそれらの訳し方がすべて違っている。直接的に対応している部分を次にあげる。

- (a) ……彼の気持ちは……と考えていた。
……in the belief that……
- (b) ……いら立ちあせる自分の気持ちをそう解するより……
…… his own dissatisfied, desperate attitude
……
- (c) ……いら立つ気持ちもありながら……

……it still was capable of upsetting him……

(d) ……甘受できる気持ちになっていた。

……his present state of mind was……

たえず出てくる同じ語に対し同じ訳語を与えたり、同じように訳したりするのは、有能な訳者のすることではないのかもしれない。もし同じ語を使うのが無能であるとするならば、この場合、原文で同じ言葉を繰り返した志賀直哉こそ無能と言われるべきであろう。

「気持ち」という同じ語が幾度も現われ、その訳語がすべて違わざるを得ないということは、これが志賀直哉にとって重要な言葉であり、しかも英訳しにくい日本語的、日本人の特性を備えているということである。この観点から次に「気持ち」という言葉について考えてみたい。

IV

「気持ち」という言葉について考えるには、まず「気持ち」の「気」について考える必要がある。

「気」の性格をよく示す言葉に、「気がする」がある。「気がする」の「する」は、さ行変格活用の自動詞で、『国語大辞典』（小学館）によると、「なんらかの動きやけはいが現われる」の意味であり、「気がする」は「気が現われる」ということである。『暗夜行路』の中に、「気がする」は、「考える」、「思う」、「感ずる」などの思考動詞に交じって頻出する。

『基礎日本語1』¹⁹⁾に於て、「考える」、「思う」、「感ずる」という言葉が対照比較されており、それによると、「考える」は、論理的分析的な複雑な思考を言い、「思う」は感性的、刹那的思考で、「考える」と違って複雑な思考過程とならない。「感ずる」は、本来知覚動詞であって、「痛みを感ずる」のような肉体的刺激に対する感覚作用から、「思う」への置き換え可能な精神的判断までの知覚思考作用を示す。

これらの思考動詞に対して「気がする」はどのような性格を備えているのだろうか。

置き換えた場合を考えてみよう。例えば、「調査研究の結果、この事項は間違っていると考えます」という文である。この「考えます」を「気がします」に変えた場合、その文は奇異なものとなる。「調査研究」という意識的で、論理的な活動を示す言葉と矛盾する感じを与える。

「気がする」は、本人の主體的な、意志的な精神作用を意味していない。一般に会議などで、本来「考える」、「思う」を使うべきところで、婉曲性や謙讓性を増すために「気がする」を使う場合があるが、それは無責任性を示すことにもなりかねない。

「考える」の対極にある「感ずる」を「気がする」に置き換えた場合を考えてみる。「寒く感じる」を「寒い気がする」と言い換えた場合、その言葉を耳にした人は、その人が本当に寒いのかどうか一瞬考えこむのではないだろうか。「寒い気がする」という状態は、急に寒気の中に出て「寒い！」と叫ぶような状態ではない。

以上の二例で言えることは、「気がする」はその人の状態であるには違いないが、他者的な性格をもっているということである。そのことを更に『暗夜行路』からの引用文で考えてみたい。

(F)自分のような運命で生まれた人間も決して少なくないに違いない。謙作はそんな事を考えた。道德的欠陥から生まれたという事は何かの意味でそれは恐ろしい遺伝となりかねない気もした。そういう芽は自分にもないとは言えない気がした。しかし自分には同時にその反対なものも恵まれている。それによって自分はその悪い芽を延ばさなければいいのだと思った¹⁵⁾。

この引用文(F)で注目したいのは、「気がした」という言葉の後の文が、「しかし」で始まっていることである。「気がした」ことの内容は、「思った」とも「考えた」とも言えるような内容である。しかしその内容が「気がした」と言われることによって、本人の主体的、意志的思考ではないことが示されている。それをより明らかに示しているのが、「気がした」の後に続く「しかし」である。「しかし」から始まる文こそ、本人の主体的、意志的な思考なのである。「気がする」の内容は、本人の中に浮かんだ思考ではあるが、本人にとっては他者的なものである。

他者的なものとしての「気」は、次のような現われ方もする。

彼は今もお登喜子を好きながら、それが熱情となって少しも燃えたたない自分の心を悲しんだ。愛子との事が自分をこうしたと言いたい気もした。しかし実は愛子に対する気持ちがすでにこうであつた事を思うと、彼は変に淋しい気持ちになつた。

彼は自身がいかにもくだらない人間になり下がったような気がした。彼はそれをじっと一人我慢する苦しみを味わいながら夜の明けるのを待つた。そしてつくづく自分にはこういう場所は性に合わないのだと思った¹⁶⁾。

ここでも「気もした」の後の文は、「しかし」で始まる。

しかしここでは、「しかし」の後に続くのは本人にとっては好ましくない否定的な事柄である。それでも、その事柄を「思う」のであり、本人の主体的な思考に変わりはない。その思いに応じて、「淋しい気持ち」となり、「くだらない人間になり下がったような気がした」状態となる。その後の文を「しかし」と続けられない。その状態に耐えた後、「自分はこういう場所は性に合わないのだと思った」のである。この「思った」内容こそ、「しかし」の後に続くべき主体的思考である。

「気がする」ことの内容には、本人にとって認め難いものもあり、また本人にとって都合のよいものもあるが、その後に続いた「しかし」で始まり「思った」で終わる文は、本人自身の主体的思考内容を現わしている。「気がする」は、本人の主体的思考を経ていない、他者的なものである。

「気」という他者的なものを持った状態が「気持ち」である。他者的なものを内に含んだ「気持ち」又は「気分」は本人に対し暴君になりうる。そのことが次のように述べられている。

謙作はこれまで、暴君的な自分のそういう気分によく引き回されたが、それを敵とは考えないほうだった。しかし過去の数々の事を考えると、多くが結局一人角力になる所を想うと、つまりは自分の内にあるそういうものを相手に戦つて来たと考えないわけには行かなくなった。……「自身の内に住むものとの争闘で生涯を終わる。それくらいなら生まれ来ない方がましだった」

そんな意味を言うと、末松は「しかしそれでいいのじゃないかな。それを続けて、結局憂いなしという境涯までこぎつけさえすれば」と言った¹⁷⁾。

他者的なものである「気」は暴君にもなる。そのような「気」と主人公は戦ってきたことを認めている。そのような戦いの結果、主人公は、「結局憂いなしという境涯までこぎつけ」た。その「境涯」が、「大身体験」である。「大身体験」を描いた引用(A)の次の語句は、注目すべきものである。

彼は自分の精神も肉体も、今、この大きな自然の中に溶け込んで行くのを感じた。その自然というのは芥子粒ほどに小さい彼を無限の大きさに包んでいる気体のような眼に感ぜられないものであるが、その中に溶けて行く。

「自然」は「気体」のようなもので、そこに精神も肉

体もすべてが溶けて行くようであると言う。この「自然」こそ「氣」である。「氣」はもともと他者であって、「氣持ち」に安らぎがなく相剋、戦いであるのは、「氣」を持つとうとするからなのであり、「憂いなしの境涯」は、「氣」に持たれている、「氣」に包まれている状態である。

その状態こそ「受け身」であり、「自己滅却」の状態で、日本人の特質が現われた状態である。

V

「自身の内に住むものとの争闘」と自分の過去を考える主人公の関心は、自分の「氣持ち」にあり、「自分の内に住むもの」である「氣」にあった。敵であった「氣」は、ついには主人公の救済者となり、主人公を包みこんで、「憂いなしの境涯」に導く。「氣」は、主人公の思想のあらゆる段階に中心に存在していたのである。そしてその日本人の性格を形作っていたのである。

そのような「氣」について、木村敏氏が、『人と人との間』に於て、より一般的に説明している。

「氣はもともと空気のことであり、それも森羅万象の根源としての空気を意味していた。それが呼吸によって人体に入り、人間の生活力の根源ともなり、そこからさらに、たましいやこころの働きの意味に転じていったものであろう。ここから、氣の姿を意味する『氣象』の語が、天地自然の様相の意にも、個人の気性の意にも用いられる」¹⁸⁾と簡潔に「氣」という言葉の歴史をまとめた木村氏は、「氣」というのは、「知情意の種々相が全てそこから出て来る源泉として、知情意の具体的諸相を超え出したもの」¹⁹⁾であり、「氣は一応は自分のものとして言われていながら、自分の自由にならぬもの、周囲の情勢次第でいろいろに変化するもの、その意味で『人と人との間』にあるものということができる」²⁰⁾と述べて、「氣」の「超個人的性格」を指摘している。「氣」とは、「個人を超え、個人を内に含むような雰囲氣的な性質をもったもの」²¹⁾である。

氏は、「氣」と「こころ」を区別し、「こころが自分自身の内部に含まれているものであるのに対して、氣はむしろ自分自身を超えて周囲に拡がり、むしろ自分を支配し、規制するものである」²²⁾と述べている。

更に、「氣」は、「主観と客観との間、意識と対象との間にある一種雰囲氣的なものであって、主観の意図とは無関係に対象に付着し、関与し、方向づけられ、配分される。これらの氣の働きの主体は、自己の側にはなくて、氣それ自体の側にある。『氣を配る』のごとく、氣が目的格で言い表わされている場合でも、それはこの氣自体の自発的な動きを、あたかも自己の能動性のごとくに言いかえているものにすぎない。自己が氣を配るよりも前に、

すでに氣それ自体がその対象に配分され配置されているのである」²³⁾と述べている。

木村氏によれば、「氣」は「知情意の源泉」であり、「氣」は「超個人性」と「自発性」を備えている。そして氏の言を借りると、「氣持ち」は、「超個人的な『氣』を、個人的な自己が分けもっている状態」である。

今迄「他者的なもの」として説明してきたものが、氏によって「超個人性」と「自発性」として説明されている。

我々日本人は、「氣持ち」が思うようにならないものを持ち、互いに矛盾するものを同時に含むことを知っている。だから、引用(B)に於て、「仕事に対する執着も、そのためいら立つ氣持ちもありながら、一方ついに人類が地球と共に滅びてしまうものならば、喜んでそれも甘受出来る氣持ちになっていた」と書かれても、不自然に感じない。いら立ちと平安は「氣持ち」の中に同居しうるものなのである。

しかし引用(B)の訳文である引用(C)に於て、「氣持ち」は共通の訳語を持ってなかった。「いら立つ氣持ち」の「氣持ち」は、直接的に対応する英訳語が与えられずに、“upsetting him”と訳され、「甘受出来る氣持ち」の「氣持ち」に対しては、“state of mind”が直接的に対応する訳語として与えられ、『『甘受出来る』という『“mind”の状態』と訳されている。

“mind”は本来、古ゲルマン語、OE、MEを通じて“memory”“thought”の意味であり、知性的作用を示している²⁴⁾。それは、「甘受出来る氣持ち」にある、いわゆる理性的な態度を表現するのに適している。「いら立つ氣持ち」の訳として“upsetting his mind”も可能だと思われるが、「混乱した状態」と「落ち着いた状態」を同時に“mind”という語が背負うのは難かしく、意味の混乱を引き起すように思われる。

引用(B)に於て上記以外に更に二つの「氣持ち」があり、各々異なったふうに訳されている。それらをすべて“mind”という語で一貫させるのは、いかに「日本文をいきなり英語に訳そうとする」訳者でも思いとどまるものと思われる。

“mind”は、「氣持ち」の意味と一致していない。人類学者の Ashley Montagu は次のように定義している。

Mind represents the expression of the social organization of the nervous elements of the whole body.²⁵⁾

「氣」の人間ばかりでなく森羅万象に通じるような「超個人性」の意味は、“mind”にないのである。

注

- 1) テキスト：暗夜行路（岩波文庫），岩波書店，1962.
- 2) テキスト：McClellan E (tr.) *A. Dark Night's Passing*, Kodansha International LTD, 1976.
- 3) 暗夜行路，後編317-318.
- 4) 同上後編295.
- 5) 須藤松雄：志賀文学の自然・生命力，文芸読本：志賀直哉，99，河出書房新社，1976.
- 6) 同上 100.
- 7) 暗夜行路，後編260-261.
- 8) 同上 260.
- 9) 同上 前編112.
- 10) 同上 114.
- 11) 荒木博之：日本人の心情論理，167-214，講談社，1976.
- 12) McClellan, 375.
- 13) E. G. サイデンステッカー，安西徹雄：日本文の翻訳，13，大修館書店，1983.
- 14) 森田良行：基礎日本語 I，139-141，角川書店，1977.
- 15) 暗夜行路，前編199.
- 16) 同上 96.
- 17) 同上 後編210.
- 18) 木村 敏：人と人との間，170，弘文館，1981.
- 19) 同上 168.
- 20) 同上 168-169.
- 21) 同上 178.
- 22) 同上 173.
- 23) 同上 174-175.
- 24) 新英和大辞典第五版，研究社，“mind”の項参照.
- 25) Montagu A : *On Being Intelligent*, 6, Green wood Press, 1973.

参考文献

- 国廣哲彌(編)：意味と語彙，日英語比較講座第3巻，大修館書店，1981
- 柳父 章：比較日本語論，日本翻訳家養成センター，1979.

(受理 昭和61年1月25日)